

モデルコース

A コース

津嘉山地域振興資料館→東の御嶽→ノロ殿内→
高津嘉山→殿小（津嘉山・玉那覇・仲間）→高倉
→弾痕のある壁

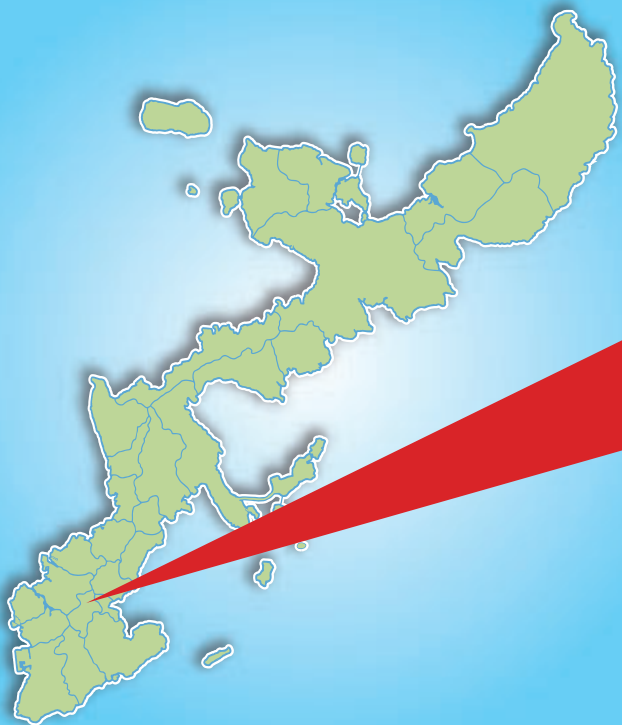
（所要時間2時間）

B コース

キーチキの御嶽→クニンドー遺跡→イーチの御嶽
→クボーの御嶽→山垣橋

（所要時間2時間）

沖縄県



津嘉山プロフィール

人口(男)…4,908人 世帯数…3,919世帯
(女)…5,190人 合計…10,098人
面積…168.6㌥

(2019年2月末現在)



作成：南風原平和ガイドの会（2012年）
発行・改訂：一般社団法人南風原町観光協会（2019年）
住所：沖縄県島尻郡南風原町字本部158
電話：098-851-7273 FAX：098-851-7109
メール：chiiki-machidukuri@haebaru-kankou.jp
HP：https://www.haebaru-kankou.jp



津嘉山

つかざんのうぎょう 津嘉山の農業

津嘉山では1976（昭和51）年にかぼちゃの、1994（平成6）年にストレリチアの産地宣言をしました。さとうきびにかわる換金作物として、かぼちゃとストレリチアが津嘉山で生産されています。

津嘉山で生産されるかぼちゃは、2000（平成12）年には沖縄県知事からかぼちゃの拠点産地として認定されました。津嘉山のかぼちゃは、太陽をいっぱい浴びた完熟かぼちゃが特徴です。銘柄は「えびす」といい、甘くてホクホクしています。加えて栄養も豊富で品質もよいため、ほとんどが本土市場へ出荷され、高値で取引されています。

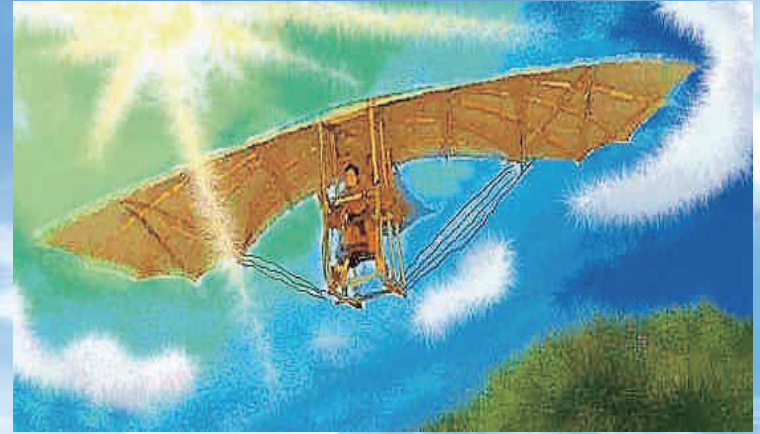
ストレリチア（ごくらくちょうか極楽鳥花）は名前の通り、めずらしい鳥に似た花の形と、赤・オレンジの鮮やかな色をしています。花言葉は「輝かしい未来」で、花持ちも良く、お祝いの席に生けるのにふさわしい高貴な花です。

ストレリチアは台風に強く年中収穫でき、またあまり人手を労しないこともあって、1998年前から花づくりを始めたきんじょうひろこ金城弘子さんは、これまでに数多くの金賞を受賞しています。



花と対話しながら育てている金城さん

とあさと 飛び安里



「飛び安里」（あさとしゅうとう安里周當）は、琉球王朝時代（18世紀後半）に独自の「飛行機」を考案して、世界で初めて大空を飛んだと言い伝えられています。

彼はまた、王家の花火師として中国からさっぽうし冊封使歓迎の折「しょうちくばい松竹梅」という仕掛花火を打ち上げたとも言われます。

「飛び安里」は、首里鳥堀に生まれ、後にここ津嘉山に移り住み、この地高津嘉山や仕立森から、いろいろ工夫を凝らして大空に挑んだのでした。

このように「飛び安里」は今から200年も前に、大空を飛ぶことを夢見た壮大なロマンと冒険の持ち主であり、また歴史を先取りした、世界に誇れる人物というべきです。

彼のその偉業を讃え広く後世に伝えるため、ここに記念碑を建立します。
（「飛び安里」初飛翔顕彰記念碑碑文から抜粋）



南風原町役場内の飛行機レプリカ



1991（平成3）年8月17日に建立された顕彰碑

このかぼちゃ畑は、かぼちゃの収穫後に土壌改良のため、ひまわりの種が撒かれることがあります。数年に一度は、一面ひまわり畑が出現します。

つかざん げいのう 津嘉山の芸能

町内の最も大きな字であることから芸能の豊富さも群を抜いています。中国冊封時代の「御冠船踊（冊封使歓待の宴で披露された芸能の総称）」など古い芸能が多く残されています。「狂言」や那覇の芝居座で創作されたものを取り入れた歌劇などが幅広く伝承されてきました。綱曳き踊りなどを含めて約30もの演目があるのです。

こうした芸能は、戦前のウフアシビ（大遊び）の際、馬場（現在の津嘉山



組踊「八重瀬（忠臣身替）」

小学校）に設けられた大舞台で披露されました。ウフアシビは、ムラガー（村井戸）の新設や普請の完成を祝って行われるもので、老若問わず村中の人々が棒術を見せながら、馬場に向けて道ズネー（パレード）して夜遅くまで楽しんだそうです。残念ながら1927年を最後に途絶えましたが、1988年には組踊「八重瀬（忠臣身替）」が復活しました。

現在では、津嘉山区民により津嘉山区「村あしび」が年に一度盛大に行われ、



津嘉山の舞方棒

津嘉山民俗芸能保存会を中心に数多くの団体が演目を披露します。

同じく村あしびを通して伝承されてきたものに六尺の檜棒で舞う「舞方棒」があります。舞台や祭りの場において清めの開幕を力強い「左舞方」で疫病・災害・悪霊を払い、「右舞方」で幕を閉じる一対の舞です。歴史が古く、由来も詳らかではありませんが、無形民俗文化財に数えられています。

また、津嘉山は青年会によるエイサーも盛んです。津嘉山には昔から伝わる「庭念仏」というエイサー歌がありました。1918年頃から踊られなくなりましたが、1984年、青年会が中心となる行事をつくろうと、旧与那城町（現：うるま市）屋慶名青年会に習い、伝統を引き継いでいます。大きな動きや声の大きさ、列の美しさ、迫力のあ



る大太鼓やパーランクー、緩急のあるサケカタミヤー、場を盛り上げるチョンダラー、女子の華麗な手踊りが見どころです。綱曳きでも演武を披露しており、旧盆の7月15日ウークイ（送り）の日には、道ズネーで集落内をまわります。その他、南風原町の地域行事やボランティア活動などにも参加しています。



だい ぐん しれいぶ つかさんごうぐん 第32軍司令部津嘉山壕群

津嘉山の高津嘉山とチカシ毛と呼ばれる小高い丘は、戦時中、第32軍（南西諸島の防備に当たった陸軍部隊の総称）の司令部津嘉山壕群が置かれた場所です。津嘉山壕群は、はじめ、第32軍の司令部として壕の構築がすすめられました。1944年末に主な司令部の機能が首里に移ったため、第32軍司令部の中の、兵器・食糧など軍事物資や軍資金を管理するための、後方支援部隊が置かれました。そのため、当時の津嘉山壕群周辺では、通行人に対しても、非常にものしい警備が敷かれていたようです。

津嘉山壕群の遺構調査は一部分しか
なされていませんが、証言などから推測される長さは2,000mと、手掘り壕の中では、沖縄県下最大の全長を持っています。また、壕内の造りも、黄金森の病院壕と比べて、とてもしっかりしていたと証言されています。津嘉山壕群の周辺には、工事トラックが入るように拡張された筋道や、軍が使用した井戸なども残っていて、津嘉山有数の戦跡となっています。



高津嘉山を望む



聞き取り調査を基に
作成された略図

きんじょう てつ お 金城 哲夫

多くの子どもたち、大人たちを夢中にさせるヒーロー、『ウルトラマン』。このウルトラマンを創った男のひとり、脚本家・金城哲夫は、津嘉山に生家を持つ、南風原ゆかりの人です。

進学のため上京、このときの学生生活の中で哲夫は、「脚本」という仕事に興味を持ち、また、出生地沖縄を改めて意識し始めたといわれています。1962年に初の自主制作映画『吉屋チルー物語』、その他いくつかの作品の脚本を手がけ、1966年には円谷プロの『ウルトラマン』制作に大きく携わりました。

「ウルトラマンの生みの親」のイメージが強い哲夫ですが、沖縄の歴史・文化を題材にした沖縄芝居『佐敷のあばれん坊』、『泊気質ハーリー異聞』などの脚本を手掛けたことも。1972年には、津嘉山大綱曳きのドキュメント作品の構成も担当しました。

こういった数々の脚本を生み出した哲夫は、1976年、不慮の事故により、わずか37歳の若さで他界しました。当時、日本中のファンから、そのあまりにも早い死を惜しまれたといえます。

生家にのこる哲夫の書斎

これまでに哲夫にまつわる展示会として、南風原文化センターや津嘉山公民館での「ウルトラマンの金城哲夫資料展」浦添美術館で「ウルトラマン伝説伝」などが開催されています。2013年の生誕75周年祭では2部構成でのスペシャルトークショー、2018年の生誕80周年祭では劇団民藝による「光の国から僕らのために一金城哲夫伝一」の公演が行われました。その際にも南風原町立中央公民館で「金城哲夫展」が開催されています。

津嘉山の生家にのこる書斎は、「金城哲夫資料館」として一般公開されており、アニメツーリズム協会の「訪れてみたい日本のアニメ聖地88（2018年・2019年版）」に選ばれました。

見学：要予約 098-889-3471（松風苑）



つかざん おおつなひ
西 津嘉山の大綱曳き **東**
 のシタク



綱曳きは14世紀察度王時代に中国から沖縄に伝わったといわれています。日本や中国、韓国にもある伝統行事です。綱曳きは毎年旧6月26日に行われるウガンチナ(御願綱)と、数年ごしに行われるウーナ(大綱)にわかれます。大綱曳きは旧6月18日に戦前は7年ごとに、現在は10数年ごとに行われています。

区民は数ヶ月前から準備を始め、当日は男たちは手に六尺棒をもち、女たちは鼓をうちならし、綱曳きの歌を歌い舞います。綱曳き勝負が終わったあとも、深夜まで歌と踊りが続きます。翌日は大綱のカナチ棒を抜き取る儀式が行われます。はずされたテンチ(手綱・枝綱)は鉦鼓隊と子どもたちによって、山垣毛をへて、長堂川に流され大綱曳きは終了となります。

つかざんのおつなひの由来譚
津嘉山綱曳き由来譚

津嘉山村に勤勉な村頭がいた。いつも村民の幸せを考えていたが、或る年害虫が異常に発生し、稲作物をはじめ農作物が不作になり、村民はひどく苦しんだ。村頭はなにかよい考えはないものかと考えめぐんだところ、ふとアムトウヌシチャ(アムトウシチャ)に捨てた老父を思いだし、早速鹿捨山に駆けて息たえの老父にそのことを伝え、よい教えを教えをこた。老父は「村中の人が集まり大声をはりあげて騒ぎなさい。すると害虫は驚き国場川に飛び込んで死ぬだろう」と教えた。

村頭は津嘉山村に帰り不作の稲で大綱を作り、綱曳きをして大騒ぎをした。すると害虫は驚き、みんな国場川に飛び込んで死んだ。村頭は老父は宝であると悟り、早速鹿捨山の老父を連れ帰って大事に孝養を尽くし、衆老の悪習を禁じたという。

1982年(南風原町文化財室)より抜粋

津嘉山地域振興資料館

2018年(平成30年)に完成した津嘉山地域振興資料館には、大綱曳きのカナチ棒、東西の旗頭、綱ひきに関する道具や資料が展示されています。



津嘉山まーい

1 ビズル(竇頭處)

十六羅漢の筆頭のなまりで霊石をまつる習俗。祈願は地域によって多様で、津嘉山のビズルは火の神と水の神を祀り、五穀豊穡、雨乞い等を祈願しています。



2 東の御嶽 アガリヌウタキ

14世紀末から15世紀初め頃、長嶺按司と仲間按司の戦いによる死者の遺骨を収集し祀った場所といわれ骨神(フニシ)とも呼ばれます。域内には津嘉山ノロのお墓もあります。



3 高津嘉山の御嶽

津嘉山の古ジマの一つ、津嘉山村にゆかりのある御嶽です。2つの門中がクニンドーから津嘉山へ移住したという、ムラ発祥由来譚が残っている御嶽です。戦前には御嶽の改修を受けました。



4 ノロ殿内屋敷跡

津嘉山の元々の集落は高津嘉山を腰当(クサテイ)森としてその南西の斜面に広がり、その斜面の最も高台に位置したノロ殿内と「大屋」という旧家があります。



5 殿小トウヌグ

殿(トウン)は、「村の草分け家」の跡に設けられる祭祀場のことで。津嘉山には津嘉山ムラ、仲間ムラ、玉那覇ムラの3つの殿があります。津嘉山ではその一帯を殿小(トウヌグ)と呼びます。



6 高倉



高倉とは穀物を貯蔵するための高床式の建物です。南風原町内に現存するのは、津嘉山に残るこの一つのみとなっています。

7 弾痕のある塀

沖縄戦の時にうちこまれた無数の弾痕が、今もそのまま残っている大変貴重な塀です。



8 中一チキの御嶽

津嘉山の古ジマの一つ、玉那覇村にゆかりのある御嶽です。戦前に御嶽の改修を受けた御嶽でもあり、拝みの対象・皇民化政策の行われた世相を語る遺物と、様々な面を持つ御嶽です。



9 クニンドー遺跡

高津嘉山から南へ連なる丘(クニンドー毛)とその周辺が遺跡です。ここを中心に東から西側に延びる尾根筋一帯に約800~500年前のグスクが築かれていました。周辺の畑地からは土器や中国磁器の破片が沢山採集されています。



10 イーチの御嶽

津嘉山の古ジマの一つ、仲間村にゆかりのある御嶽です。戦前には御嶽の改修を受けました。近年の発掘調査で生活用品や動物の骨などが出土し、仲間村の存在が裏付けられました。



11 クボーの御嶽

地域の中では最も古い御嶽で、津嘉山に初めて人が住んだところとも言い伝えられます。周辺からはグスク時代の遺物や人骨が発見されています。



12 山垣橋

この辺りはその昔、津嘉山の仲間按司と豊見城の長嶺按司が戦った古戦場跡だといわれています。また綱曳きの終わったあと、手綱は子供たちによって長堂川に流されました。



今も残る井戸とアール